

2022年8月14日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 10章 1～12節

説教題：一つ上の自由へ

私は「アーミッシュの赦し」の話を良くしますが、その事件を扱ったセミナーに出たことがあります。そのタイトルは「アーミッシュ・グレースー(『赦し』は悲劇をどのように変えたか)」というものでした。2006年10月2日、ペンシルベニアのアーミッシュの村の学校に銃を持った男が乱入して、5人の子供を殺し、自分も自殺しました。アーミッシュのコミュニティーにとっては測り知れないほどの大きな悲しみと嘆きでした。しかし、事件の6時間後、アーミッシュの人々は、犯人の家族の許に出かけて行って、そして「私達は彼を赦します」と「赦し」を宣言したのです。事件以上に、その「赦しの宣言」に驚いて、世界中から2500のメディアが取材に来たそうです。特に興味深く聞いたことがあります。実はその事件の8日前にも1つの事件があって、1人のアーミッシュの子供が、33歳の女性の運転する車に撥ねられて死亡したのです。犯人は逃げました。ところが、取材に来た記者に対して、子供のお母さんはこう言ったのです。「犯人が見つかって欲しい。その人に『私は赦します』と言いたいから」。これを新聞で読んだ犯人が、自首して出たのです。子供が銃で殺された時、彼らは「赦し」を宣言しました。それは1回限りの特別なことではなかったのです。いわば、それが彼らの生き方になっていたのです。私は、深く自分の心を探られました。このことは、後にまた触れます。

今日の個所が取り扱うのは難しい問題です。私達は、その人生において色々なところを通らされます。信仰生活は、大きな喜びや祝福の生活ですが、しかし「(所謂)ばら色」の生活ではありません。様々な試練の中を通ることがあるのです。中には「離縁」という辛い現実を通られる方もおられます。いや、私自身もその痛みを経験することがあるかも知れません。そうでなくても、勇気がなくてひたすら我慢しているだけ、というところを通るかも知れません。いずれにしても「信仰の学び」は、「私と神様の関係」を学ぶものです。「私の生き方、私の在り方」を学ぶものであり、「誰かのことを測る物差し」を学ぶわけではありません。聖書の御言葉は、決して「御言葉で誰かを裁く」ような用いられ方をしてはならないのです。いや、それどころか、「離縁」の痛みを通った方だけが語り得る信仰の言葉があると思います。日本のキリスト教の代表的な指導者の1人であった内村鑑三も、離縁を経験した人です。メソジスト教会の創始者ジョン・ウエスレーの結婚生活も、破壊的なものだったと聞きます。でも彼らは、多くの人々に大きな影響を与えました。痛みを知っているが故に、悩みの中、痛みの中にある人の心に響く「信仰の言葉」があると思います。いずれにしても、この個所を学ぶ中で「離縁」の痛みを経験された方が辛い思いをされるようなことがないようにと、心から願います。そしてこの個所は、「離縁」の問題を入り口としますが、それを越えて、全てのキリスト者に「信仰のあり方」を教える個所です。「神と私の関係」という視点で学びましょう。

1節に「イエスは、そこを立って、ユダヤ地方とヨルダンの向こうに行かれた…」(1)とあります。イエス様は、いよいよ十字架の待つエルサレムに向かう歩みを始められたのです。イエス様は、8章34節で「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」(8:34)と言われました。エルサレムへの道は、弟子達にとっては、十字架を担いでイエス様に従い行く歩みのはずでした。しかしその歩みを始めた時に、イエス様が弟子達に語られることになったのは、「離縁についての話」であり、次の13～16節「子供のこと」であり、さらに17～31節「富についての話」なのです。いずれもその切っ掛けがあったのですが、いずれにしても「結婚関係、子供との関係、富との関係」、それは、私達の日常生活に関わりの深いことです。聖書が書かれた時代に生きた人々も、私達と同じように日常生活を送り、家庭を営む人も多かったでしょう。子供が生まれれば子育てをしたことでしょう。また生きて行くためには、ある程度の富が必要でした。それは私達の生きる現実です。「その1つ1つの現実の中で、イエス

様の弟子に相応しい心持ちを持って生きて行くには、どうしたら良いのか」、それは初代教会の時代から現代に至るまで、キリスト者の変わらない問いです。そのキリスト者の切実な問いに答える意味でも、マルコはこの個所を書き残したのかも知れません。

この発端は、パリサイ人の質問です。2節「パリサイ派の人々が近寄って、『夫が妻を離縁することは、律法に適っているのでしょうか』と尋ねた。イエスを試そうとしたのである」(2 新共同訳)。「律法に適っているか」とありますが、律法には「人が妻をめとって、夫となったとき、妻に何か恥ずべき事を発見したため、気に入らなくなった場合は、夫は離婚状を書いてその女の手に渡し、彼女を家から去らせなければならない」(申命記 24:1)と定められていました。彼らは良く知っていました。しかし論争になっていたのは、『恥ずべき事』とは何か」ということです。ある人達は「妻の不貞だ、それ以外の理由では離縁が出来ない」と言いました。ある人達は「料理が下手だということも理由になる、家の外に聞こえるような大きな声でおしゃべりすることも理由になる…何でも理由になる」と言いました。パリサイ人は、自分が悩んで答を聞きに来たのではない。「イエスが離縁についてどのように考えているのか」、論争になっているこの問題について口を開かせることによって、何らかの罠にはめようとしたのでしょう。

しかし、この質問の問題は何かというと、「夫が妻を離別することは…」(2)と言っているように、当時のユダヤ社会では離婚を言い出すことが出来るのは、男だけだったということです。特別な例外を除いて、女性が離婚を言い出すことは出来ませんでした。女性は「もの」として見られていたのです。そして、ユダヤ教の中に『恥ずべき事』とは何か、これを緩く、緩く、拡大解釈しようとする傾向があった。それは、当時のユダヤの男性の中に「結婚の問題も、離婚の問題も、自分達の自由に考えたい、結婚したい時に自由に結婚し、離婚したければ自由に離婚したい。それなのに『申命記』の戒めがあるから自由が制限される、窮屈だ。せめてその制限をなるべく広げて、なるべく自由に思い通りに出来るようにしたい」、そういう思いが働いていたと思います。私は、洗礼を勧められた時に—(大学3年生でしたが)—牧師に言いました。「タバコは止めます。でも酒は止められません。酒は止めなくても良いですか」。(結局、たばこもすぐには止めなかったのですが…)。神の恵みは経験していました。だから、神の恵みを受けて生きたいと思いました。しかし「あれはダメ、これはダメ」と言われるのは嫌でした。「神は信じたい。でもある部分では、神抜きで好きに生きたい」と思ったのです。卑近な例で恐縮ですが、もしかしたら似たものがあったかも知れません。そういう思いが、恐らくこの質問の背後にあるのです。しかしそれは、信仰の問題として、勘違い、間違いなのです。

このことは、決して当時のユダヤ人男性の問題ばかりではありません。CS ルイスが現代のキリスト者について、「真面目に信仰生活はしましよ、でも信者の義務を果たした後は、神に干渉されないところで自由にやりたい…そういう意識、間違った信仰生活の理解を多くのキリスト者が持っている」(CS ルイス)と言うのです。ですからこの問題は、「離縁」の問題を越えて「信仰生活をどのように考えるか、信仰生活の目標をどこにおくのか」という、信仰生活の基本に関わる問題になって来るのです。

信仰生活の目標を理解するためには、今私達が立っているところを確認しなければなりません。私達はどのような者なのか。イエス様は言われます。「モーセは、あなたがたの心がたくななので、この命令をあなたがたに書いたのです。しかし、創造の初めから、神は、人を男と女に造られたのです。それゆえ、人はその父と母を離れて、ふたりの者が一心同体になるのです。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません」(5~9)。イエス様は『モーセの律法』が云々を越えて、「神の御心」に人々の目を向けさせるのです。男性は、女性を「もの」と考え、自分の所有物と見ていた。しかし6節に「しかし、創造の初めから、神は、人を男と女に造られたのです」(6)とあるように、「神は男も女も等しく大切なものとして造られた」という、神が人をどう見ておられるか、神の前で人はどのよ

うな存在なのか、そのことを示されたのです。イエス様のポイントは、『人との関係』を『神との関係』で考えなければならない」ということです。

「申命記」10章に次のようにあります。「イスラエルよ。今、あなたの神、主が、あなたに求めておられることは…ただ…主を恐れ、主のすべての道に歩み、主を愛し、心を尽くし、精神を尽くして…主に仕え、あなたのしあわせのために…あなたに命じる主の命令と主のおきてとを守ることである…あなた方は…もうなじのこわい者であってはならない…主は…かたよって愛することなく…みなしごや、やもめのためにさばきを行ない、在留異国人を愛してこれに食物と着物を与えられる。あなた方は在留異国人を愛しなさい。あなた方もエジプトの国で在留異国人であったからである」(申命記10:12~19)。後半の部分に「隣人(在留異国人)を愛しなさい」という戒めがありますが、「隣人を愛する愛」がどこから出て来るのかというと、それは「主を信じ、主を愛するところから、『この人は、主が愛しておられる人なのだ』と、『主がこの隣人を愛することを求めておられるのだ』と思うところから出て来る」と言われているのです。イエス様が言うておられることも、このことなのです。「神を信じるといことは、神の御言葉に心を開くことであり、神の御旨を素直に受け入れることであり、神が大切に考えておられるあなたの隣人に対して『神への愛』を持って向かうことだ」と言われる。(その人の背後にイエス様を見るということでしょうか)。そのような意味で聖書には「隣人への愛」が強調されているのです。その流れの中に「コリント人への手紙」13章の「愛の章」があるのです。「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます」(コリント13:4~7)。

しかし、一体私達の誰が、そのような愛で家族を、隣人を愛しているのでしょうか。誰にそれが出来るのでしょうか。「それが神を信じることだ」と教えられても、また頭では「それは良い」と思っても、「私達には出来ない」という現実があるのではないのでしょうか。私はもう長く、「赦せない」という問題に苦しんでいます。赦さなければならないことは分かっている。しかし「ハイ」と素直に頷けないのです。なぜ出来ないのか。そこに私の罪性があるのです。神の願われるような愛に生きることが出来ない罪性があるのです。神が恵み豊かな方であることは知っています。しかし、それでもなお神の言葉に心を開き得ない、なお神の言葉に「ハイ」と頷けない罪性、頑なさがあるのです。そう考えると、人との関係も、信仰者にとっては「信仰の問題」、私達が—(と言ってよいのでしょうか)—しっかりと握り締めている罪の問題であることが分かって来ます。

そうであるなら、私達が本当に神と和らぎ、信仰の祝福を経験するためには、「神に嫌われないように義務を果たして、その後は自分の好きなように生きる、どれだけ好きに生きることが出来るかを考える」、そういう信仰生活が、的外れなものであるかが分かります。信仰生活というのは、「神の願っておられるように生きることが出来るように、神の願っておられるような隣人との関係に生きることが出来るように」、自分が変わる事、神の恵みによって変えて頂くこと、そのことが大切なことなのです、それが目標にすべきことなのです。そこに本当の祝福があるはずなのです。

以前、水曜集会で取り扱った「人生を導く5つの目的」の中でリック・ウォレン牧師は、「私達が『自由に生きたい』と思っている状態、『それは「自由」に生かされている状態ではない』と言っています。「私達が『自由だ』と思っている状態、その本質は『自我、人の期待、お金、怒り、恐れ、プライド、欲望、エゴに動かされている姿だ』」と言っている。私達は自分の経験からもそのことを知っています。私達が「自由」だと思っている感情、それは本当に自由なのか。自由どころか、実は色々なものに振り回されて生きていく姿ではないのでしょうか。

「アーミッシュ・グレース」のセミナーの中である人がこう質問しました。「彼らはその犯罪を赦した。でもそれは客観的に正しいことなのか」。難しい問題です。しかし講師によると、彼らは、第一義的には、犯人の家族のことを思って赦したのではない。彼らは「私達は自由になるために赦

すのだ」と言ったそうです。もちろん彼らが「赦し」に生きようとするのは、まずイエス様がそう教えられたからです。「だから、こう祈りなさい。『…私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました』。もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してください。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません」(マタイ 6:8~15)。その他、聖書の中には「赦し」に関する教えが沢山あります。彼らは、イエスの教えに従って生きようとしている。そこから「赦し」は出て来ているのです。アーミッシュの1人は言ったそうです。「なぜ『赦す』か『赦さない』かで騒ぐのか。クリスチャンだったら赦すことは、すでに決まっていることではないか」。この言葉に激しく心探られました。彼らは、イエス様に従って生きようとした結果として赦した。しかし、同時に彼らは、自分が自由になるために赦したのです。激しい憎しみに縛られて生き続けることがないように、その憎しみから解放され、自由になるために赦した。それが彼らの言い分だった。良く「絶対に赦しません」という言葉を聞きます。耐えられない痛みを負わされた方にとって、それは自然な感情だと思います。だから、私などがとやかく言えることはありません。でも「自由になるために赦す」という言葉は、言い換えれば「主の言葉に従う時に自由になるのだ」と教えているように思います。神の御心に適う生き方を求めること、神の御心に適う生き方が出来るように変えられることを求めること、それこそが私達自身を本当に自由にする生き方であり、力ある生き方であると思います。「力ある生き方」というのは、例えばこれらの事件では、それだけが「復讐の連鎖」を断ち切ることが出来るからです。子供を撥ねた犯人の心を捕らえたのも「赦し」だったです。

しかし、そのためにはどうすればよいのでしょうか。ここで私達は、イエス様が十字架に向かって歩き始められた、その時にこの言葉を語っておられることを考えなければなりません。アーミッシュの人達は、またこうも言ったそうです。「イエス様が十字架で死んでくれた、その十字架の痛み、それを思う時に赦すことが出来た。神の助けによって赦すことが出来た。赦しの力は神から来るのです」。彼らは「迫害する者を赦すことが出来るようにして下さい」という古い祈りを、日常の祈りにしているのです。同じように私達もイエス様の十字架を思う時、十字架の上で手を広げて「あなたのために十字架に掛かっているのだよ」と言われるイエスの声を本気になって聞く時、そして十字架の赦しを受け取る時、心に働く神の霊の働きによって、私達の心は少しずつ溶かされ、私達は少しずつ変えられて行くのではないのでしょうか。そして少しずつ、具体的な生活、人間関係の問題の中で「変えられる祝福」、そのことによる自由を、経験して行くのではないのでしょうか。